

小宗教雑誌『無教会』出でんとす

内村 鑑三

第一号、来たる三月十日発行

『無教会』は大判四ツ折りの小雑誌なり。編集主任はやはり内村鑑三氏、毎月五日一回の発兌とす。

『無教会』は現在の教会に反対するものにあらず、また無教会主義を唱うるものにあらず。

『無教会』は、僻地（へきち）にありて出席すべきの教会なく、またある事情のために教会に出席するあたわず、また出席するを好まざる者のために発行せらる。

『無教会』は無教会信者の交通機関なり。またその奨励者なり。慰藉者（いしゃしゃ）なり。また特別にその家庭の友たるをもつて自任す。

『無教会』は国政を議せざるはもちろん、教会政治すら論ぜず。談ずる事は神の事、靈魂の事、天国の事、天然の事のみ。安心して読まれよ。

『無教会』は一枚定価わずかに三銭、一カ年分前金三十銭、郵券代用苦しからず。一人にて五部以上注文の方へは二割引き、紙は上等、印刷は鮮明、子どもにも、おとなにも、老人にも適す。発行所 東京四谷角筈 聖書研究社

（一九〇一年二月『聖書之研究』）

無教会論

内村 鑑三

『無教会』（註）と言へば、無政府とか虚無党とか言うようで何やら破壊主義の冊子のように思はれますが、しかし決してそんなものではありません。『無教会』は教会の無い者の教会であります。即ち家の無い者の合宿所とも言うべきものであります。すなわち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります。「無教会」の無の字は、「ナイ」と訓むべきものでありまして、「無にする」とか「無視する」とかいう意味ではありません。金の無い者、親の無い者、家の無い者はみな可憐な者ではありませんか。そうして世には教会の無い、無牧の羊が多いと思えますから、ここにこの小冊子を発刊するに至ったのであります。

世には、名はりつぽで実はきたないものがあります。表紙がりつぽで中のごくつまらない書(ほん)があります。顔が美しくして心のごく醜い婦人があります。外貌がごくやさしくして心は鬼のような男があります。これに反して、名は平凡でも実はエライ人がありますし、表紙は渋紙でも中は金玉をつらねた書があります。奸婦は美人の内に多く、癡人(どうじん)は多くは美男子であるそうです。物なんでも名と外形とばかりではわかりません。ある人が英国有名の学者ドクトル・ジョンソンを評しまして、「彼は皮膚だけの熊(くま)である」と申しました。熊のような顔をしており熊のような素振(そぶり)をしておったドクトル・ジョンソンは、英国中に一番やさしい人でありました。

『無教会』もちょうどそんなものになりたいと思います。こわすように見えて実は建てるもの、こわいように見せて実は愛らしいもの、熊の皮をかぶつていて小羊の心を持ち、社会に大革命を起こすもののように見えて実は少女と老人の友になりたいと思います。世に般若(はん)にや)の面をかぶった者はみな般若であると思う者が多くありますから、私ど

もはわざと般若の面をかぶつて、物の外形にばかり注意している人どもを逐散し、心の中を探る者を引き付けて、ここに無教会なる大教会を建てようと思いません。

こう言うと、何やら私どももまた野心をいだく者のように思う人もありましようが、それは決してそうではありません。真正(ほんとう)の教会は実は無教会であります。天国には実は教会なるものはないのであります。「われ、都(天国)の中に聖所(教会)あるを見ず」とヨハネの黙示録に書いてあります。監督とか、執事とか、牧師とか、教師とかいう者のあるはこの世限りのことでもあります。かしこには洗礼もなければ晩餐式もありません。かしこには教師もなく弟子もありません。

われ、新しき天と新しき地を見たり。先の天と先の地はすでに過ぎ去り、海もまたあることなし。われ、聖き都なる新しきエルサレム、備え整い、神の所を出でて天よりくだるを見る。その状(さま)は、花嫁、その花婿を迎えんために飾りたるがごとし

『無教会』はこういう教会を世に紹介せんために働くつもりであります。

しかし、この世にいる間はやはりこの世の教会が必要であります。そうして、ある人は、人の手をもつて作った教会に参し、そこに神を賛美し、そこに神の教えを受けます。ある教会は石をもつて作られ、ある教会は煉瓦(れんが)をもつて作られ、またある教会は木をもつて作られます。しかし私ども何びとも出席する教会を持つというわけではありません。世に無教会信者の多いのは無宿童子の多いのと同じであります。ここにおいてか私ども無教会信者にも教会の必要が出て来るのであります。この世における私どもの教会とは何であつて、どこにあるのでありましようか。

神の造られた宇宙であります。天然であります。これが、私ども無教会信者のこの世における教会であります。その天井(てんじょう)は蒼穹(あおぞら)であります。その板に星がちりばめてあります。その床(ゆか)は青い野であります。そのたたみはいろいろの花であります。その楽器は松のこずえであります。

す。その楽人は森の小鳥であります。その高壇は山の高根でありまして、その説教師は神様ご自身であります。これが私ども無教会信者の教会であります。ローマやロンドンにあるという、いかにりっぱなる教会堂でも、この私どもの大教会には及びません。無教会これ有教会であります。教会を持たない者のみが実は一番善い教会を持つ者であります。

(一九〇一年三月『無教会』)
(註) 著者によつて発行された月刊雑誌。「小宗教雑誌『無教会』出でんとす」参照。

『無教会』雑誌

内村 鑑三

本誌はもともと教友の交通機関を目的として発行したものでありまして、一名これを「紙上の教会」ととなえてもよろしいものであります。すなわち私ども、行くべき教会を持たざる者が、天下の同志と相互に親愛の情を交換せんために発行された雑誌であります。それゆえに本誌は「独立雑誌」や「聖書之研究」とはちがひ、記者が筆を執ること、わりあ

いに少なく、読者が報と感とを伝うること、わりあいに多かるべき性質の雑誌であります。読者諸君はよくこの事を心に留めておいてください。

しかるに今日までは、諸君の多くはあまり遠慮に過ぎて、諸君の御思想（おかんがえ）を多く送られませんでしたのは遺憾（いかん）千万であります。

諸君は常に読者にばかりなっておつてはいけません。諸君も時には記者（かきて）にならなくてはなりません。信仰というものは、聞いてばかりでは決して上達するものではありません。私もはたびたびこれを他に分け与えなければなりません。『無教会』雑誌がこの機会を諸君に供しますのに、諸君がこれをお用いなさらないのはどういうわけでありますか。

決して名文はいりません。普通ありのままの文でたくさんです。私とても決して文章家ではありません。しかし心を感じたるままを書けば、それが世を益する文章となるのであります。『聖書之研究』第十二号における「講談会感想録」（注）をごらん下さい。その中のあるものは実にりっぱな文章であります。十六歳の女子なる西沢八重子嬢の書かれた文です。心の赤誠（まこと）よりわき出した文であり

ますから、だれに見せても決して恥ずかしからぬ文章であります。私もはいわゆる文章家の文章なるものは大キライであります。文は何でもよろしゅうございます。わかりさえすればたくさんであります。ただ諸君の感じたそのまゝを聞かしてください。

諸君は記者とばかり語るではなくして、また広く信仰上の友人を天下にお求めなさい。諸君はなにも孤独を歎くする必要はありません。諸君の同志は天下に少なくはありません。これを「無教会」の紙上においてお求めなさい。諸君は最も聖い教会をこの小さき雑誌において発見せらるるであろうと思いません。

（一九〇一年九月『無教会』）